

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿/高度医療人材養成拠点形成事業の取り組み 2面：日本糖尿病学会第4回キャリアアデバロップメント奨励賞を受賞して/日本災害医学会優秀論文賞を受賞して/教授退任にあたって 3面：退職にあたって 4面：最終講義/弘前大学学生表彰 5面：医学科学位記伝連式/臨床実習生(医学)認定証授与式/第119回医師国家試験結果ならびに令和6年度卒業生の進路状況 6面：入学試験報告/青森県知事と新入生との懇談会/研究室研修および優秀発表賞について/写真コラム 7面：優秀賞を受賞して/若手研究者紹介動画 8面：第13回世界自閉症啓発デー特別講演in弘前/学生だより一年間を振り返って/書籍のお知らせ 9面：関連病院勤務報告/若手教員・医師のひとり 10面：研究室紹介 社会医学講座 11面：研究室紹介 リハビリテーション医学講座/部活動紹介 陸上競技部 医学管弦楽団 12面：人事異動

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆



今年一月に文部科学省から「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」(JPEAKS)の採択を受けたところですが、待望の「弘前大学グローバルWell-being総合研究所(以下、「研究所」)が入居する研究棟が完成(左図)し、本学の研究力向上のための体制整備が着々と進められております。二〇〇五年から始まった地域一般住民健康「岩木健康増進プロジェクト」は、国立研究開発法人・

今年一月に文部科学省から「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」(JPEAKS)の採択を受けたところですが、待望の「弘前大学グローバルWell-being総合研究所(以下、「研究所」)が入居する研究棟が完成(左図)し、本学の研究力向上のための体制整備が着々と進められております。二〇〇五年から始まった地域一般住民健康「岩木健康増進プロジェクト」は、国立研究開発法人・



医学研究科長 石橋 恭之

グローバルWell-being総合研究棟が完成しました

医学研究科長 石橋 恭之

科学技術振興機構(JST)の革新的イノベーション創出プログラム(CO-I)の採択、さらには共創の場形成支援プログラム(COINEXT)へとつながり大きく発展してきました。そして二十二年間にわたる構想が結実し、新たな研究拠点が弘前大学本町地区に開設されることになりました。医学・医療研究の発展はもとより、地域社会の健康と福祉の向上に大きく貢献するものと確信しております。あらためて研究所の設置規程をみると、その目的は「社会・居住環境も含めた超多項目健康・医療ビッグデータ(統合リアルワールドデータ)を基に最先端の予防医学・健康社会学研究を総合知により展開・先鋭

化し、世界レベルの研究拠点を構築するとともに、研究成果の社会実装を産学連携で牽引することにより、人と社会のWell-being実現に寄与するイノベーションの創出に資すること」とあります。そして、①グローバルヘルス・予防医学部門、②ライフサイエンス・テクノロジー部門、③Well-beingソーシャルサイエンス部門、この三つを研究所に設置することになります。今後は医学研究科にとどまらず、人文・教育・保健・理工・農生などの学内各学部、研究科、研究所から多様な分野の研究者が集い、さらには多くの企業や国内外の大学と連携を深め、学際的視点からWell-beingに関する研究を推進していくこととなります。

Easy-accessな次世代型プレジジョン医療臨床研究を推進する 恒久的な研究医養成プログラム

令和6年度 大学教育再生戦略推進費 高度医療人材養成拠点形成事業 (高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援) 【秋田大学・弘前大学】



現在、人事院勧告に対応するために、大学本部からは更なるポイント抑制(人員削減)が医学部にも求められております。働き方改革とも相まって、研究体制を維持することも困難になることが予想されます。しかし我々には二十年にわたる岩木のビッグデータがあり、さらには研究棟が完成しました。弘前大学はこれを核に、JPEAKSの一角として日本を代表する研究大学に発展できるように、一丸となって頑張らなければなりません。これからの支援、ご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

弘前大学は、令和六年度の文部科学省の「高度医療人材養成拠点形成事業(高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援)」に、秋田大学の連携校として採択されました(図)。この事業は「教育」と「研究」の二本の柱で構成されており、秋田大学には「臨床研究医養成センター」、弘前大学には「臨床研究医養成室」が新設されました。両大学は緊密に連携し、リサーチマインドを備えた臨床医・研究医の養成ならび

に研究業績のさらなる向上に向けた活動を展開しています。【教育】事業では、医学科学生はStudent Assistant (SA)として雇用され(弘前大学ではMedical Student Assistant, MSA)、希望に応じて学内の各講座へ配属されます。学生は在学中から主体的に研究に取組み、その成果を学会発表や論文として公表することにより、リサーチマインドが涵養され、基礎医学と臨床医学の両面に精通した臨床研究医

の養成につながるものが期待されています。本事業の中核をなす取組みの一つが、「リサーチドクター養成キャンプ」です。昨年度は、令和七年三月一日土曜日より二日間、秋田県大潟村のホテルサンルラル大潟にて開催されました(写真)。本キャンプには、秋田大学からSA二十四名・教員二名、弘前大学からSA十一名・教員六名が参加し、SA各自が自身の研究成果についてプレゼンテーションを行いました。非常にレベルの高い発表もあり、また活発で有意義な討論が交わされました。両大学の多くの研究者が一堂に会した二日間は、SAのみならず教員にとってもリサーチマインドが刺激された素晴らしい機会でした。

【研究】事業では、医師の働き方改革を推進しつつ、効率的に研究活動の機会を確保することを目的とし、電子カルテからのデータ抽出システムの活用を進めています。これにより、臨床医や研究者が容易に医療情報へアクセスできる環境の整備が行われる予定です。これまで薬剤部を中心に進められてきた遺伝情報に基づいた薬物動態の解析に加え、がんや循環器疾患、腎疾患などを対象とした研究を、秋田大学および弘前大学の各講座が連携して推進していく予定です。

高度医療人材養成拠点 形成事業の取り組み

医学教育学講座 准教授 花田 賢二



究力の低下が懸念され、また医師の働き方改革など大きな制度的変化に直面する中で、本事業を契機として、医学科学生のみならず、大学院生、若手教員を含む次世代の医療人材のリサーチマインドを涵養し、医学研究科全体として基礎・臨床の両分野における研究活動のさらなる発展を目指します。なお、リサーチドクター養成キャンプは今年も年に一回の開催が予定されており、次回は令和八年二月二十八日(土)から三月一日(日)まで、再びホテルサンルラル大潟にて開催される予定です。弘前大学からも、多くの学生・教員の参加が期待されており、本事業のさらなる深化が望まれます。

【受賞報告】 日本糖尿病学会

第4回キャリアアデベロップメント 報奨金を受賞して

内分泌代謝内科学講座 教授 藤田 征弘

このたび、日本糖尿病学会 第四回キャリアアデベロップメント報奨金を基礎研究・臨床研究を融合させた研究課題「グルカゴン関連ペプチドの細胞生物学的・生理学的・疫学的な網羅的探索から糖尿病の病態を再考する」で、受賞致しました。応募に際しまして大学院医学研究科長の石橋教授にはご推薦を戴き、まことにありがとうございます。

本報奨金は糖尿病分野での研究において一定の成果をあげ、日本国内の大学または研究施設において糖尿病に関する研究を主導する役割に新たに就任した者に対し、更なる研究の発展と研究者育成、および、研究・教育の充実を図るための支援を行うことを目的として、日本糖尿病学会が二〇二一年より新たに設けた賞です。私は決して十分な業績を上げてきたわけではありませんが、二〇二三年十月に就任しましたので今回挑戦させていただきました。二名の受賞者の一人に選ばれたことができました。医学部ウォーカー百十二号にも書きました。第四十三回唐牛記念医学研究基金も同時に拝受し非常に身の引き締まる思いです。

われわれの講座の前身である旧内科学第三講座は初代教授として後藤由夫先生が一九七一年に就任され開講されました。当講座では世界的に現在でも糖尿病研

優秀論文賞を受賞して

【受賞報告】 一般社団法人 日本災害医学学会
災害・被ばく医療教育センター 助教 辻口 貴清

この度、日本災害医学学会 優秀論文賞を拝受いたしましたのでご報告申し上げます。論文名は「青森県における原子力災害を想定した医療ニーズの推計—DHCOS (Damaged Hospital Continuation Support) を用いた事前リストに基づいた評価と対応のあり方—」で、この論文は日本災害医学学会誌 (J. J. Disaster Med.) の第二十九巻に掲載されました。

この度、日本災害医学学会 優秀論文賞を拝受いたしましたのでご報告申し上げます。論文名は「青森県における原子力災害を想定した医療ニーズの推計—DHCOS (Damaged Hospital Continuation Support) を用いた事前リストに基づいた評価と対応のあり方—」で、この論文は日本災害医学学会誌 (J. J. Disaster Med.) の第二十九巻に掲載されました。

激甚災害が発生した場合、新規患者や既存の入院患者に医療提供を継続するために被災地の病院機能維持が必須となります。近年、病院機能維持支援は災害急性期から実施すべき重要事項との認識が広まっており、実際に急性期の災害医療支援を担う日本DMA



第30回日本災害医学学会総会において受賞した際の写真
(左) 災害・被ばく医療教育センター 伊藤勝博 教授
(中) 災害・被ばく医療教育センター 辻口貴清 助教
(右) 青森県立中央病院 雪田大樹 先生

教授退任にあたって

脳神経病理学講座 教授 若林 孝一



二〇〇〇年二月に新潟大学脳研究所から弘前大学医学部附属脳神経血管病態研究施設に教授として赴任してから二十五年が経過し、教授としての定年を迎えました。この間、学務委員長七年、学務委員長四年、医学部長を四年務め、現在は理事・副学長となり六年目に入りました。現在の脳神経を尺度化する新たな指標を考案したことを中心に、青森県において自然災害と原子力災害の複合事象に見舞われた際の病院機能維持に係る物資等の必要数を推定した結果を報告しました。また、それに伴い特に下北半島の病院や社会福祉施設へのライフライン支援の在り方を記載しております。日本は周知の通り災害大国です。このような学術的な取組を通し、医療機関の災害対応力強化に貢献し、地域社会の災害対応・防災・減災に寄与できるよう努めて参ります。

最後に、研究の遂行に際し多大にご指導いただきました花田裕之先生、奈良岡征都先生、災害・被ばく医療教育センターの伊藤勝博先生に感謝申し上げます。



退職にあたって

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授 松原 篤

仙台で過ごした後、一九八一年に弘前大学医学部に入學してから四十四年、耳鼻咽喉科医を専攻して三十八年、そして弘前大学医学部耳鼻咽喉科の五代目の教授職を拝命して十年八か月で善く退職を迎えることになりました。これまでお世

にはことごとく応募しました。最初はなかなか採択されませんでした。申請書を書いていくうちにコツをつかんだのか、科研費に關しては二〇〇六年度から二〇二五年度まで連続して採択されました。時間はかかりましたが、研究環境、研究力、研究費の三つが何とかそろい、この二十五周年に教室からは約四百編の論文を出すことができました。さて、自分の苦勞話を書いている場合ではありません。弘前大学は最近、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業に採択されました。つまり、全国に二十五ある研究大学に認定されたことになりました。この事業では大学全体の研究力向上とともに、弘前大学を中心とする研究大学群の構築を目指すこととなります。医学研究科の果たす役割は大きいと言わざるを得ず、医学研究科・附属病院のさらなる発展を期待しております。最後に、医学研究科の皆さま、学内外の多くの共同研究者に感謝を申し上げます。教授退任の御挨拶いたします。ありがとうございます。

(次ページへ続く)

(前ページより)

自分が教授になろうとも、なれるとも全く思っていま

〇一五年は自分を含めて講

う重要な城の石垣を築くこ

退職にあたって

医学医療情報学講座 教授 佐々木 賀広



私は、一九八五年弘前大

spoilitaを射て、前頭葉

から、パソコンが起動しな

以来、病変の特徴抽出に憑

退職にあたってー最後の自己評価ー

脳神経病理学講座 准教授 森 文秋



一九八九年に弘前大学に

自己評価を行うことが定

「非常によくできた」

「人生は楽しく、幸

退職にあたって

医学教育学講座 講師 松谷 秀哉



この三月をもって定年退

「右手に生成AI、左手に

長い間、本当にお世話に



- 1. 『学生を大切にせよ』
2. 『論文作成のために
3. 『小さな分野でも世
4. 『仲間を作れ』
5. 『かわいい子には旅
6. 『学問研究の扉は常
7. 『人生は楽しく、幸

物理学科で宇宙放射線の研

したシステム開発等に取り

のみなならずユーザ自身も



退職にあたって

石灰化大動脈弁との出会い 血管・炎症医学講座 助教 瀬谷 和彦



私は平成八年に弘前大学に着任しました。はじめは、心筋ミトコンドリアに関する研究を進め、ミトコンドリア内cAMPが心筋細胞アポトーシスを誘発するという知見を得ましたが、当時はcAMPによる心筋保護作用が主流で注目されず、研究費獲得もままならない状況でした。

そんな中、平成十八年頃に古川賢一先生(当時准教授)より大動脈弁をやってみないかと誘われたのが、石灰化大動脈弁との出会いでした。大動脈弁狭窄症は、症状を自覚してからでは大動脈弁置換術という高侵襲の治療法しかないという状況でした。そこで、当時大学院生の于在強先生(現講師)と共に大動脈弁置換術で得られた石灰化大動脈弁より間質細胞を単離培養し、性状を調べました。その結果、間質細胞が炎症性サイトカインの刺激に感受性が高く、骨形成タンパク質産生を介して石灰化する分子機構の存在を見出しました。さらに壮年期相当の三十週令正常ラットでも弁石灰化が一部進行することを確認しました。

これら知見は、弁石灰化を抑える治療薬の開発や検診による弁石灰化早期発見の可能性を強く示唆し、研究の基軸となって現在に至っています。この間、石灰化大動脈弁間質細胞が弁内皮細胞に由来する可能性や、cAMPが細胞外マトリックスタンパク質発現低下により弁石灰化を誘発すること、超聴診器による弁石灰化の早期発見の可能性等の知見を得てきました。そして、古川先生や于先生に加え、元村成名誉教授、

令和六年度の最終講義が、令和七年三月二十六日に医学部講義棟にて行われ(WEBでも配信)、今年度退任される三名の教授、佐々木賀広教授(医学医療情報学講座)、松原篤教授(耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座)、若林孝一教授(脳神経病理学講座)が最終講義を担当されました。

令和六年度 最終講義

佐々木賀広 教授
(医学医療情報学講座)

松原 篤 教授
(耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座)

若林 孝一 教授
(脳神経病理学講座)

学務委員長 富田 泰 史 教授
(循環器腎臓内科学講座)



「シグナルとノイズ」…旧



生理学第二講座の鈴木壽夫教授のご指導のもと、眼球運動に関する基礎研究に着

手され、その後は旧第一内科にて消化器内科の診療に従事されました。臨床の傍ら開始された画像自動解析の研究は、まさにライブワークとして深化を遂げ、「ノイズの中にこそシグナルがある」という確固たる信念のもと、同分野の発展に大きく貢献されました。その研究成果は、医学にとどまらず、「遠隔養殖」や「遠隔畜産」といった他分野へ応用され、学際領域の飛躍的進展をもたらしました。学術の枠を超えて展開された研究のスケールは壮大であり、最終講義はその知的探究の歩みと到達点を見事に体現するものでした。

松原篤教授による「アレルギーと私」…冒頭で、教室員の飛躍的な増加に触れるとともに、内耳の研究を深めるためにノルウエーのオスロ大学へ留学されたご経験を紹介されました。帰国後はアレルギー疾患の研究に注力され、特にスギ花粉の飛散開始日を予測する技術を開発し、社会実装に至る成果として広く社会に還元されました。また、好酸球性中耳炎に関する研究では、診断基準の作成やモデル動物の開発を通じて、その病態の解明に貢献されました。岩木健康増進プロジェクトにも積極的に関与され、腸内細菌と抗原感作



若林孝一教授による「脳が教えてくれたこと」…「三百円持って百七十円の買い物をしてしまいました。おつりはいくらでしょう?」という、誰もが即答できる問いかけで始まり、聴講者の心は一気に引き込まれました。この問いを皮切りに、神経変性疾患の研究、特に脳の老化と認知症に関する研究の歩みが、情熱とともに語られました。アルツハイマー病およびパーキンソン病の発症機序については、病理



講義終了後には、三人の先生方それぞれに多くの花束が贈呈され、会場を埋めた聴衆から盛大な拍手が送られました。最後に石橋恭之医学研究科長より謝辞が述べられ、最終講義の幕が閉じられました。令和七年四月から、佐々木先生は地域医療学講座の特任教授として、松原先生は附属病院における手術の指導医として後進の育成に、そして若林先生は引き続き本学の理事(企画担当)として、本

若林孝一教授による「脳が教えてくれたこと」…「三百円持って百七十円の買い物をしてしまいました。おつりはいくらでしょう?」という、誰もが即答できる問いかけで始まり、聴講者の心は一気に引き込まれました。この問いを皮切りに、神経変性疾患の研究、特に脳の老化と認知症に関する研究の歩みが、情熱とともに語られました。アルツハイマー病およびパーキンソン病の発症機序については、病理

学的手法を駆使して丹念に解析を重ね、仮説と異なる結果が得られた際にも、柔軟に新たな仮説を構築しながら研究を進ませてくださいました。また、多系統萎縮症(MSA)のモデル動物の作成や、その機序解明、さらには治療薬の開発にも取り組まれ、実りある成果を挙げてこられました。長年にわたり神経変性疾患の謎に挑み続けてこられた若林先生の研究の軌跡が語られ、知的探求心と粘り強い探究姿勢が随所にあふれる、まさに先生の研究人生の集大成にふさわしい感銘深い講義でした。

弘前大学では、毎年、研究活動や課外活動で活躍した学生の団体および個人を表彰しています。令和六年度は、医学科からは二つの団体および個人二名が表彰を受けました

講義終了後には、三人の先生方それぞれに多くの花束が贈呈され、会場を埋めた聴衆から盛大な拍手が送られました。最後に石橋恭之医学研究科長より謝辞が述べられ、最終講義の幕が閉じられました。令和七年四月から、佐々木先生は地域医療学講座の特任教授として、松原先生は附属病院における手術の指導医として後進の育成に、そして若林先生は引き続き本学の理事(企画担当)として、本

令和六年度 弘前大学学生表彰

教育委員会委員 今泉 忠 淳 (血管・炎症医学講座 教授)

【表】 令和六年度学生表彰を受けた医学科の団体と学生

いずれも、第67回東日本医科学生総合体育大会での成績により表彰	
<団体>	
医学部ラグビー部	ラグビー競技 準優勝
医学部水泳部	水泳競技 女子100mフリーリレー 準優勝 (張間蓮、梶百合子、安藤舞佳、吉岡夏実)
<個人>	
安藤 舞佳	水泳競技 女子200m自由形ならびに女子400m自由形 優勝
安達秀太郎	柔道競技 60kg級 準優勝



に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和6年度 医学科学位記伝達式

学務委員長 富田泰史
(循環器腎臓内科学講座 教授)



令和六年度の医学科学位記伝達式が、令和七年三月二十四日十六時より医学部基礎大講堂にて挙行されました。当日は、福田眞作学長、袴田健一附属病院院長、澤田美彦副学長、理事長の列席のもと、晴れやかな雰囲気の中で式が始まりました。石橋恭之医学部長から卒業生一人ひとりに学位記が手渡され、医学部長挨拶では「卒業はゴールではなく医師としての新たなスタートである」と語られ、六年間の学びを経て大きく成長した卒業生に対し、今後の活躍と医学への貢献への期待が述べられました。続いて、澤田副学長からは、「鵬」のごとく力強く羽ばたき、世界に向けて大いに活躍してほしいとの思いを込めた温かい祝辞が贈られました。



式典終了後の十九時から、アートホテル弘前シティにおいて、医学科卒業生による卒業記念謝恩会が開催されました。謝恩会幹事による明快な司会のもと、石橋医学部長および学務委員長の祝辞で開幕しました。会場では、先生方を囲んで、学びや課外活動の思い出を語り合い、今後の進路について語らうなど、卒業生は限られた時間を惜しむように過ごしていました。謝恩会恒例のビンゴゲームや学長とのジャンケ

り、そのうち八十三名が弘前大学の関連医療施設において臨床研修を行う予定です。今年度からは地域枠の学生に加え、学士編入学の卒業生も弘前大学の関連施設で臨床研修を行うこととなり、例年以上に多くの本学出身者が、県内の医療施設で臨床研修医として従事する予定です。医師国家試験合格の直後ということもあり、当日の式典では多くの卒業生が晴れやかな笑顔を浮かべ、まさに祝福の日となりました。

令和7年度 臨床実習生(医学) 認定証授与式

学務委員長 富田泰史
(循環器腎臓内科学講座 教授)



令和七年度臨床実習生(医学)認定証授与式(旧SD章授与式)が、令和七年二月二十八日十三時より医学部基礎大講堂にて挙行されました。新五年次学生百四十一名が、医の倫理に則って行動することを誓い、「臨床実習生(医学)」としての自覚と責任を胸に、診療参加型臨床実習(Clinical Clerkship)に臨むことを宣言しました。臨床実習においては、患者さんと直接向き合う責任の重さを真摯に受け止め、診療行為を通じて患者さんから医学・医療を学ばせていただくことへの感謝の気持ちを忘れず、医療チームの一員として誠実に行動する姿勢が求められます。

式典終了後の十九時から、アートホテル弘前シティにおいて、医学科卒業生による卒業記念謝恩会が開催されました。謝恩会幹事による明快な司会のもと、石橋医学部長および学務委員長の祝辞で開幕しました。会場では、先生方を囲んで、学びや課外活動の思い出を語り合い、今後の進路について語らうなど、卒業生は限られた時間を惜しむように過ごしていました。謝恩会恒例のビンゴゲームや学長とのジャンケ

ン大会では、会場は大いに盛り上がり、あつという間の二時間となりました。最後に壇上で卒業生から先生方に花束が贈られ、感謝の気持ちとともに謝恩会の幕が閉じられました。同級生が集まる機会はおそらくこれが最後になるかもしれません。弘前大学医学部医学科卒業生という誇りを胸に、それぞれが今後も切磋琢磨し、全国そして世界に大きく羽ばたいていくことを、心より願っています。

ると同時に、臨床実習を開始するために必要な知識と技能を習得したことを証明するものです。認定証授与式では、新五年次学生全員が真新しい白衣に身を包み、厳粛な面持ちで式に臨みました。式典では、石橋恭之医学部長および学務委員長から挨拶があり、続いて袴田健一附属病院院長より訓示をいただきました。その後、附属病院長から新五年次学生代表の佐々木清順さんに認定証が授与され、最後に佐々木学生代表が、以下の「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓しました。

R1~R6 卒業生進路状況	R1年度 卒業生進路		R2年度 卒業生進路		R3年度 卒業生進路		R4年度 卒業生進路		R5年度 卒業生進路		R6年度 卒業生進路	
	人数	%	人数	%								
青森県	60	48.4%	54	49.1%	68	46.9%	56	43.1%	64	43.5%	75	58.1%
北海道	4	3.2%	4	3.6%	2	1.4%	3	2.3%	2	1.4%	2	1.6%
青森県以外の東北地方	13	10.5%	12	10.9%	12	8.3%	21	16.2%	21	14.3%	10	7.8%
東京以外の関東地方	22	17.7%	20	18.2%	24	16.6%	19	14.6%	29	19.7%	25	19.4%
東京都	4	3.2%	2	1.8%	7	4.8%	5	3.8%	6	4.1%	5	3.9%
中部	11	8.9%	10	9.1%	8	5.5%	8	6.2%	6	4.1%	3	2.3%
近畿以西	4	3.2%	5	4.5%	9	6.2%	6	4.6%	7	4.8%	4	3.1%
国試不合格・その他	6	4.8%	3	2.7%	15	10.3%	12	9.2%	12	8.2%	5	3.9%
合計	124	100.0%	110	100.0%	145	100.0%	130	100.0%	147	100.0%	129	100%
医師国家試験合格者	118	95.2%	107	97.3%	132	91.7%	119	91.5%	136	92.5%	124	96.9%

「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」
1. 私は、人類への奉仕に自分の人生を捧げることを誓います。
2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊厳をもって医学の務めを果たします。
3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間の性の法理に反して医学の知識を用いることにはしません。
4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。
5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死後においても尊重します。
6. 私は、私を教え導く人々に尊敬と感謝の念を捧げます。
7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。

令和七年度二月に実施された第百十九回医師国家試験の結果が公表されました。全体の受験者数は一万二千八百七十九人(うち新卒九千五百七十九人)であり、合格率は九二・三%(同九五・〇%)でした。設置主体別の新卒者の合格率は、国立九六・一%、公立九六・五%、私立九五・〇%でした。本学の受験者数は百四十六人(うち新卒百二十九人中、受験者百二十八人)、合格者数百三十七人(同百二十四人)、合格率は九三・八%(同九六・九%)であり、三年連続して低迷していた合格率は、第百十五回(令和三年二月実施)以来で全国平均を上回りました。今年度の結果を詳細に検討す

密を、たとえその死後においても尊重します。私は、私を教え導く人々に尊敬と感謝の念を捧げます。私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。

ると、留年を経ずに六年間で卒業した新卒生の合格率は九九・二%と非常に高く、留年を一度でも経験した新卒生の合格率は六六・七%と昨年までと同様の傾向ではありますが、その差が顕著となりました。留年を経験した学生に対するサポート体制の充実が必要なのは明らかで、医師国家試験合格率向上に向けた対策

(勉強スペースの確保や模試の積極的な活用に加え、教育カリキュラムの検討)に取り組み始めております。次に、令和六年度卒業生の進路状況をご報告いたします。青森県は七十五人(五八・一%)であり、例年に比べて多い結果になりました。そのためか、今年度は青森県以外の東北地方が十八人(七・八%)と昨年に比べて少ない一方で、東京都を含む関東地方は三十人(二三・三%)と昨年同様でした。学生の出身地が初期研修病院の選択にも影響しているようです。既に初期研修が始まっておりますので、先生方、ご指導のほどよろしく申し上げます。

第119回医師国家試験結果ならびに令和6年度卒業生の進路状況

学務副委員長 三上達也
(先制医療学講座 教授)

と、留年を経ずに六年間で卒業した新卒生の合格率は九九・二%と非常に高く、留年を一度でも経験した新卒生の合格率は六六・七%と昨年までと同様の傾向ではありますが、その差が顕著となりました。留年を経験した学生に対するサポート体制の充実が必要なのは明らかで、医師国家試験合格率向上に向けた対策

入試専門委員会報告

令和7年度 入学試験報告

医学科入試専門委員長 上野 伸哉

(脳神経生理学講座 教授)

日常生活において新型コロナウイルス感染症以前の状況に戻ってきたことを実感することが多くなってきています。

男女比では、例年に比べて女子学生の割合が高まり、とくに一般選抜では女子が男子を上回る結果となりました。これは、総合型選抜における男子受験者の減少傾向も影響していると考えられます。

【地域別入学者の傾向】 青森県出身者の割合は十三名(二九%)と依然として高い水準を保っています。北海道および「その他地域」からの入学者が増加傾向にあり、今年度は「その他」からの入学者が過去最多の四十七名となりました。

【志願者・入学者の動向】 本年度の志願者倍率は、以下の通り上昇傾向を示しました。

区分	志願者倍率 (受験者倍率)
総合型選抜 II	2.12 (2.10)
一般選抜 (前期)	8.86 (6.99)
全体	6.33 (5.15)
学士編入学	8.50 (7.80)

とくに一般選抜において志願者数が増加し、全体として前年(令和六年度…五・七一倍)より高倍率と

【選抜制度の変更点】 令和七年度入試より、以下のような入試制度の変更を実施しました。総合型選抜 II…従来実施していたワークシヨップを廃止し、大学入学共通テストの得点、ケーススタディ、個人面接の結果による総合的評価を中心としています。受験生の主体性・意欲・行動力を重視した評価に焦点をあてています。一般選抜(前期日程)…これまで導入していた「総合問題(文章・資料の読解・分析)」を廃

止し、従来通りの数学および英語の学力試験に戻す形となりました。加えて志願者数の増加により、志願者倍率が目安の八倍を超えたため二段階選抜を実施しました。今回の変更の趣旨は入学者の多様性を担保する観点から、選抜区分と重点評価項目を組み合わせた整合性を高めました。総合型選抜 II は、行動力や意欲に評価の重点をおき総合的評価重視とし、一般選抜は学力重視を反映したものに なります。

【今後の展望】 今後の展望として、首都圏・東北・北海道等各地での対面型説明を含めた情報発信活動を強化し、弘前大学医学部の教育理念と特色が広く受験生に届くように努めていきます。今後とも入試業務へのご協力をお願いします。

青森県知事と新入生との懇談会

学務委員長 富田 泰史 (循環器腎臓内科学講座 教授)

令和七年四月三日十八日より、医学部基礎大講堂にて、宮下宗一郎青森県知事と弘前大学医学部医学科新



入生との懇談会が開催されました。この懇談会は平成十七年に始まり、以降二十一年にわたり継続して実施されており、県知事と医学生との直接対話の場として、全国的にも極めて貴重な取り組みとなっています。春には新入生を、秋には五年生を対象として開催されており、今回の新入生との懇談会は、宮下知事の就任後二回目の開催となりました。当日は、宮下知事のほか、守川義信健康医療福祉部長、藤野安弘良医育成支



援特別顧問ら県の関係者が出席し、石橋恭之医学部長、袴田健一附属病院長の列席のもと、学務委員長の司会で行われました。懇談会の初めに、宮下知事より新入生への温かいメッセージを込めた講演がありました。青森県では人口減少が進む一方で高齢者人口は依然として多く、地域医療を支える一人ひとりの医師の役割がかつてないほど重要であることを強調

されました。そして新入生に対して、「皆さんは青森県の『希望の星』です」と力強く語りかけられました。続いて、「では、どのような医師を目指すべきか?」という問いに対し、知事はフランスの文豪バルザックの著書に登場する言葉「No less oblige」(高貴なる者の義務)を引用し、医学部の六年間を通じて「人間性を高めることの大切さ」を説かれました。「お医者様ではなく、『医師』になってほしい」「医師の一言で救われる患者やご家族がいることを忘れないでほしい」と、新入生に向けて真摯で熱意あるメッセージを送られました。講演後には新入生との懇談が行われ、「人間性を高めるにはどうしたらよいか?」という質問に対し、知事は「多くの人と話し、本を読み、そして旅をすること」と述べられました。懇談会は和やかな雰囲気の中、県のスタッフも交え、活発な意見交換がなされ、学生たちにとっても非常に有意義な時間となりました。



写真コラム(28) 茂森町から長勝寺・禅林街への丁字路

血管・炎症医学講座 教授 今泉 忠 淳

医学部の正門を出て、左に向かい、真っ直ぐ行って突き当たるところが茂森町です。突き当たって、左に曲がり、少し行くと長勝寺・禅林街(禅宗のお寺が立ち並ぶ通り)へ向かう丁字路があります。【写真1】は、1984年の写真で、その丁字路を長勝寺側から見たところです。正面が八百屋さんで、その左隣は美容院であったことがわかります。八百屋さんの一階の屋根の上に、映画のポスターがずらりとならんでいます。画面の左端に消火栓の標識があり、「火事の注意も家事のうち」と書かれています。【写真2】は、同じ場所の2024年の写真です。八百屋さんと美容院のどちらも跡形もなくなっています。茂森町は、北は弘前城、南は新寺町に接する、南北に細長い町で、江戸時代には、城下町弘前の防衛上の重要なエリアであったとのこと。昭和時代には、賑やかな商店街を形成していて、劇場や旅館などもあったそうです。現在でも、数軒の商店がありますが、静かな通りになっています。普段の生活の中では、長勝寺や禅林街を訪れることはあまりないと思いますが、気分転換に散歩してみるのもよいと思います。



【写真1】茂森町 1984



【写真2】茂森町 2024

令和6年度 研究室研修および 優秀発表賞について 分子病態病理学講座 教授 水上 浩 哉

令和六年十月から約半年間、週三日午後三時生が各講座に配属され研究室研修が行われました。研究室研修では授業の一環として実験を行っている教官から直接研究指導を受けることができます。一般的に学生

の皆さんが研究に興味を持つても、なかなか研究を行う時間をつくることはできません。働き方改革で労働時間の削減が求められている現在、指導する教員も特別に時間をつくることは(次ページへ続く)

(前ページより)

なかなか困難です。そのような状況で、研究室研修は実際に学生の皆さんに研究を体験してもらう非常に貴重な機会となります。またそれに加え、研究室研修は医学英語Ⅲの授業もその内容に含まれていることから、英語での発表、抄録作成、短い論文形式のレポーター提出と将来の学会などにおける研究発表の疑似体験もできます。令和六年度の発表会は令和七年一月二十九日から三日間行われました。各講座から推薦された三人の審査員の方に発表内容、質疑応答を採点していただきました。昨年度同様、該当セッションとその前後のセッションの学生の皆さんに会場へ来てもらい、残りの方はTeamsでオンライン視聴としました。発表会では、緊張している方もいましたが、多くの学生さんは練習の成果を十二分に発揮し、英語で発表を行っておりました。質疑応答は大部分の生徒、教員の方々とともに日本語でした。

が、一部の生徒はすべて英語で質問に答えておりました。昨年度と同様のお願いですが、原稿を読むのではなく暗記を、また不完全でも構わないので英語による質疑応答を期待したいところです。採点結果から評価点が高かった、整形外科講座で研修した上原崇雅さん、消化器血液免疫内科学講座で研修した中野皐月さん、糖鎖工学講座で研修した古川陽南子さんの三人を研究室研修優秀発表賞とさせていただきます。四月十四日の優秀発表賞贈呈式で、石橋研究科長から優秀発表賞を贈呈されました。研究室研修から研究に興味を持ち、さらに学会発表、論文文化まで進める学生さんがひとりでも多く出てくることを期待したいと思います。また、各講座の指導教官の先生方には忙しい中、学生の皆さんを指導していただき厚く御礼を申し上げます。令和七年度も、またご協力どうぞよろしくお願いたします。

優秀賞を受賞して

医学科四年 中野皐月

このたび、私は研究室研修において優秀賞をいただきました。大変光栄に思います。

本研究のタイトルは「Biomarker Analysis for Predicting the Efficacy of Anti-CD38 Antibodies in Multiple Myeloma (多発性骨髄腫に対する抗CD38抗体療法の有効性予測マーカー探索)」です。多発性骨髄腫に対する抗CD38抗体医薬の治療成績について、治療



有効である可能性が示唆されました。

重要な課題のひとつです。今回の研究室研修では、岩木健康増進プロジェクトで得られたデータを用いて、大腿骨彎曲の要因解明を目的に統計的解析を行いました。

データの収集から統計処理、仮説の検討まで、初めてのことがばかりで戸惑うことも多くありましたが、先生方のご助言のもとでひとつひとつ乗り越えることができました。七百十人のCT画像から両膝計千四百二十本の大腿骨の彎曲角度を計測する作業は根気を要しましたが、佐々木先生の「これだけ多くの本数をやるからこそ意味がある」という言葉を支えに、なんとかやり切ることができました。

医学科四年 上原崇雅

令和6年度 研究室研修 および優秀発表賞について

このたび、研究室研修優秀発表賞をいただくことができ、大変光栄に思っております。まず初めに、日頃より丁寧な指導をいただいた佐々木先生、富田先生をはじめ、整形外科科学講座の皆様にご心より御礼申し上げます。

私の発表内容は「Influence of femoral bowing on severity of knee symptoms and radiographic knee osteoarthritis in Iwaki cohort study (岩木コホート研究における大腿骨彎曲が膝の症状およびX線所見による変形性膝関節症の重症度にも与える影響)」でした。変形性膝関節症(膝OA)は高齢化に伴い増加しており、整形外科領域にお

り始めることが増えました。研究結果として、大腿骨彎曲は六十歳以降に増加し、年齢、肥満、骨密度低値が関連していることがわかりました。この成果から、膝OAの発症・進行予防には、減量や骨粗鬆症治療が

開始時の臨床指標をもとに予後を予測する手法を検討しました。具体的には、大病院で治療を行っていた

多発性骨髄腫の患者さんの情報を電子カルテから抽出しました。そして、全生存期間や無増悪生存期間を評価指標とし、Mann-WhitneyのU検定などの統計手法を駆使して群間比較や要因解析を行いました。解析の結果、血清リンの値が患者さんの予後に影響している可能性が示唆されました。今日、個々の患者さんの背景要因を考慮した治療が求められていますが、本研究はこのような個別化医療の構築に寄与することを目的として実施されました。

私は、医学部に入学する以前は、看護師として血液内科病棟で勤務していました。当時、抗がん剤治療や移植に臨む患者さんに接してきた経験が、今回の研究にも深く影響していると思います。病気や治療の副作用に苦しむ患者さんを少しでも減らせるようになりたいという気持ちを思い出しながら研究室に通いました。電子カルテに記載された情報の一つひとつに、あの頃関わった患者さんたちの顔が重なり、「この研究が誰かの希望につながってほしい」という思いを持って取り組めました。今後は、医療現場で得た視点と、研究で得られた視点を融合させながら、「目の前の患者さん」に寄り添い、そして「未来の患者さん」に貢献できる医師を目指して学びを深めていきたいと思っています。

最後になりますが、解析や考察に悩む私に優しく熱心に指導してくださった消化器血液免疫内科学講座の立田先生および同講座の先生方に改めて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

この度は、研究室研修優秀発表賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。ご指導いただきました糖鎖工学講座の米山徹先生には、研究のみならず、スライド作成の工夫についてのご助言から発表のリハーサルに至るまで、手厚くサポートしていただきました。今回の受賞は先生のご指導があつてこそのもので感謝しております。改めて、深く感謝申し上げます。今回の研修では、LactinAcPSAという新しい前立腺がんのバイオマーカーを用いた前立腺がん検査に関して、臨床応用

令和6年度 研究室研修 および優秀発表賞について

医学科四年 古川陽南子

この度は、研究室研修優秀発表賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。ご指導いただきました糖鎖工学講座の米山徹先生には、研究のみならず、スライド作成の工夫についてのご助言から発表のリハーサルに至るまで、手厚くサポートしていただきました。今回の受賞は先生のご指導があつてこそのもので感謝しております。改めて、深く感謝申し上げます。今回の研修では、LactinAcPSAという新しい前立腺がんのバイオマーカーを用いた前立腺がん検査に関して、臨床応用

ていただきました。研修の初回には、先生より現在の前立腺がん検査が抱える課題や、本研究が医療現場にもたらしうる可能性についてご説明いただきました。具体的には、前立腺がんにおける過剰診断、過剰治療が課題とされており、LactinAcPSAを用いることで悪性をより正確に診断できれば、患者さんや医療従事者の負担軽減につながるということが期待されます。こうした研究の意義を理解したうえで取り組むことで、明確な目的意識をもって実験に臨むことができました。実験では、予想と異なる結果に戸惑う場面もあり

りましたが、これまでのデータを参照して原因を考察・修正しながら再測定を行う中で、研究とは試行錯誤の連続であることを実感しました。非常に小さな単位での操作など繊細さが求められる場面も多く、正確性と集中力が求められることを身をもって体験しました。こうした積み重ねを通して、研究の面白さと難しさの両方を肌で感じ、充実した研修期間となりました。最後に、先生が時間をかけて準備されてきた研究において、学生の身でありながら実験操作を含め深く関わらせていただいたことに、心より感謝申し上げます。臨床に直結する研究に携わるといふ貴重な経験を通じて、多くの学びを得ることができました。今回の経験を今後の学びや将来に活かしていきたいと考えております。

弘前大学大学院医学研究科 第10回 若手研究者紹介動画

医学研究科では、各講座で研究されている原則40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第10回目は附属病院/小児科 病院助手 田中龍彦先生。「ダウン症に合併した骨髄性白血病治療の課題」についてご紹介します。



病院助手 田中 龍彦 (附属病院/小児科)

医学研究科ホームページで公開中!

紹介動画はこちら ↓



第13回世界自閉症啓発デー

特別講演会in弘前

神経精神医学講座 教授 中村和彦

毎年四月二日は「自閉症啓発デー」です。当講座では平成二十五年から弘前市および弘前市教育委員会のご後援のもと、弘前自閉症児者親の会と合同で特別講演会やシンポジウムなどを開催しています。

今年、四月二日に弘前大学医学部コミュニケーションセンターで特別講演会を開催しました。本講演会には、当事者の方やその保護者の方々、学校や行政、障害福祉関係などの支

援者の方々など例年以上に多くの方々にご参加頂きました。

今回の特別講演会では、山口大学名誉教授の木谷秀勝先生をお招きし、「発達障害のある女の子・女性の支援」という演題でご講演いただきました。

一般的に、自閉スペクトラム症の有病率には男女差があり男性の方が有病率が高いとされています。しかし実際は、女性の発達障害の行動様式は男性と異なっており、診断基準や心理検査の多くが男性の発達障害の行動様式を基準としているため女性の発達障害が診断されにくいこと、加えて女性は発達障害らしさを隠してしまう傾向があることなども、女性の発達障害が少なくとされる要因といわれています。



「現在支援している子どもに当てはまる部分が多く、非常に勉強になった」といいます。発達障害らしさによる女性特有の生きにくさや、実際に木谷先生が行われている支援についてご講演頂きました。保護者の方や支援者の方々からの質問にも答えて頂き、「とても学びの多い講演だった」

二年生として過ごしたこの一年は、学びと経験の積み重ねを通じて、これからの成長につながる貴重な時間となった。講義では基礎医学の各分野に本格的に踏み込み、日々目にする情報量は膨大で、その内容は詳細かつ複雑だった。初めの頃は知識を詰め込むことに精一杯だったが、次第に各科目の関連性を考えながら複合的に学ぶ姿勢が、より深い探求につながることを実感するようになった。また、「異常を知るにはまず

正常を理解すること」という言葉の重みを実際の学びを通して痛感する機会が多かった。学習を進める中で、これまでに得た知識が各科目における学びの土台となっていることを改めて認識した。今後、より専門的かつ臨床的な内容を学んでいくにあたり、現在の学習がその基盤となるという自覚を持ち、勉学に励みたい。

こうした学びの日々の中で、昨年は特に友人や周囲の人々に支えられて過ごした一年でもあった。難しい内容を悩んだ際には、友人と協力して理解を深め、知識を習得することができた。また、学業以外の場面でも助けられることが多く、周囲の存在のありがたさを何度も実感した。一年を通じて、尊敬する先輩や同期から良い刺激を受けたが成長することができたと感じている。切磋琢磨できる大切な友人をはじめ、周囲の人々への感謝を忘れずに、これからの日々も丁寧に過ごしていきたい。

医学科二年次は知識の深さと広がり、そして自身の学び方や姿勢と真剣に向き合う一年であった。解剖学を皮切りに、生理学、微生物学、病理学など数多くの基礎医学科目に取り組み、日々医学の奥深さを実感し

一年間を振り返って

医学科三年 小倉有貴

一年間を振り返って

学生だより

という感想が聞かれました。また、当事者の方々からは「共感した」という声

また、弘前市のご後援により四月二日の日没から弘前城天守閣のブルーライトアップも行われました。このライトアップは自閉症啓発デーのシンボルとして発達障害への理解と支援を広げるための取り組みです。今回の特別講演会とブルーライトアップが一人でも多くの方に届くことで発達障害について知り考える機会となることを願っています。



【陸奥新報社提供】

のほか、「木谷先生が山口県で行われているような、居場所づくりの支援を弘前でも行ってほしい」という要望を頂きました。当講座でも木谷先生のご指導を頂きながら支援の場を提供する準備を進めたいと思います。

「現場から伝える呼吸機能検査のコツ

基本のスパイロメトリーから精密検査まで」

田坂 定智 (呼吸器内科学講座 教授)

このたび「現場から伝える呼吸機能検査のコツ 基本のスパイロメトリーから精密検査まで」を刊行しました。呼吸機能検査は、呼吸器診療において非常に重要な役割を果たしており、呼吸器疾患の早期発見から確定診断、治療方針の決定まで多くの場面で欠かせない検査です。術前の評価などで何気なく行った呼吸機能検査で、思わぬ異常が出て焦ったという経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないでしょうか。本書は日本呼吸器学会で毎年開催している臨床呼吸機能講習会で講師を務めている先生や各施設の検査技師

の方を中心に執筆いただきました。呼吸機能検査に関わる初心者の方や実務経験のある方まで幅広い読者を対象に、現場視点での実践的な情報を提供することを目的として編集しました。とくに若手医師や検査技師、看護師、また呼吸器に関する知識を深めたい医療従事者の方々の念頭に置き、理論的な知識に加え、実際の検査手技や患者対応、トラブルシューティングの具体例も盛り込んでいます。また実際に遭遇しがちな症例を通して、臨床での応用力を高めるための実践的なアプローチも紹介しています。呼吸機能検査をオーガーする機会のある医師や検査結果を目にする方のあるすべての医療従事者の方に手に取っていただきたい一冊となっています。

書籍のおしらせ

現場から伝える呼吸機能検査のコツ 基本のスパイロメトリーから精密検査まで 田坂 定智 著 南山堂



一年間を振り返って

医学科三年 金原拓海

た。初めは膨大な情報量に戸惑い、覚えることに精一杯だったが、繰り返しの学びの中で点と点だった知識が少しずつ繋がっていき、感覚を得られた。医学は一見すると細かく分かれた分野の集

関連病院勤務報告

地域の病院で研修して

JCHO秋田病院 整形外科 石橋 光

(前ページより)
合体のように見えるが、本質的にはヒトという一つの生命体を理解するための総合的な学問であり、個別の臓器や反応がどのように全身と関わっているのかを考えることで、学びに深みが生まれた。そのため、単なる暗記に頼るのではなく、現象の背景や相互作用に着目し、深く掘り下げて理解することの大切さを強く意識するようにになった。一方で、試験対策、実習、課外活動との両立に悩む場面も多かった。時間は常に限られており、すべてをやりきることの難しさに直面することもあった。優先順位の判断や効率的な学習方法を模索する中で、自己管理能力の重要性を実感した。同時に、無理に詰め込みすぎた結果、体調や精神面に影響が出ることもあり、健康を守ることも医学の一部であると実感する機会も多かった。また、日々の学びの中で支えとなったのは、共に学ぶ仲間たちの存在である。勉強を教え合い、悩みを共有し、励まし合う中で、協働の価値を実感した。将来、チーム医療の一員として働くうえで、こうした経験は確実に活きるものと信じている。この一年を通して、医師を目指すうえで必要な知識や技術だけでなく、「自分はなぜこの道を選んだのか」という原点にも立ち返ることができた。今後も初心を忘れず、常に学び続ける姿勢と謙虚な心を持ち、医療人としての責任を果たしていきたい。そしてこれから始まる臨床医学科目はこれまで積み重ねてきた基礎医学の知識をもとに実践的な学びへと繋げていきたい。

私は弘前大学大学院医学研究科整形外科講座所属の石橋光と申します。平成三十一年に弘前大学医学部を卒業し、現在医師六年目となります。このたび、無事に整形外科専門医を取得することができました。初期研修では三つの病院を回り、二〇二四年四月からは秋田県能代市にあるJCHO秋田病院で勤務しています。当院は弘前大学整形外科の関連施設の中でも特に人気が高く、経験豊富で情熱的な大塚博徳院長のもと、市民から厚い信頼を得ている病院です。院長先生に加え、寡黙ながら的確な判断で病院を支える工藤整先生の指導のもと、日々穏やかで充実した環境で診療にあたっています。JCHO秋田病院は慢性期病院としての役割を担っており、整形外科の一般的な疾患だけでなく、心疾患、肺炎、認知症などの内科的管理も求められます。全百五十床規模の小規模な病院ですが、入院患者の多くを整形外科が占めており、病院経営の中心的な存在となっています。

地域の病院で研修して

青森県立中央病院 神経血管内治療科 放射線診断・IVR治療科 岩村 暢 寿

現在、青森県立中央病院で放射線診断医・IVR専門医・脳血管内治療科として勤務している岩村暢寿です。私は、五所川原高校出身で二〇〇八年に自治医科大学を卒業しました。青森県立中央病院で初期研修後、九年間の義務年限として大間病院を中心に青森県の地域医療に従事しました。二〇一八年から青森県立中央病院で放射線診断医のための研修を本格的に開始しました。専門医の取得は三十代後半になったため、自分の記憶力の衰えがのしかかり、試験勉強には苦慮しましたが、二〇二一年に放射線診断専門医、二〇二二年にIVR専門医、二〇二三年に脳神経血管内治療専門医を無事に取得することができました。この記憶

族、そして地域に寄り添いながら治療にあたることの大切さを、私はこの病院で深く実感しています。弘前大学整形外科は関連病院が非常に多く、多様な診療経験を積むことができ、臨床のみならず、学会発表などの学術活動や、スポーツドクターとしての活動も盛んであり、自分の興味や適性に合った道を見つけることができる環境が整っています。整形外科に興味を持っている学生の皆さんがいらっしやいましたら、ぜひ一度病院や医局に見学にお越しください。実りある経験ができるよう、私たちが全力でサポートいたします。

紹介したいと思います。当院は大山事業管理者、廣田院長のもと経営の立て直し、青森市民病院との合併に向けて様々な改善が行われていきます。業務の効率化、DX、縦・横・斜めの部署のつながりの構築、ハラスメント対策に特に力が注がれています。当科は掛田伸吾教授のほかに、二〇二五年より医師六人体制となりました。内訳は専門医三名、専攻医二名です。で、現時点では検査科の拡大や迅速な読影結果をお返しするとまではいきませんが、当科としてはマンパワーの拡充は最大の力となっています。当科の業務は、CT、MRI、核医学検査の全件読影と体幹部IVR(一部脳血管内領域を含む)となります。緊急読影はリモートでも対応できるシステムがあるため、依頼があれば二十四時間迅速対応することができ、緊急IVRに関しても外傷や危機的産科出血なども同様に二十四時間対応しています。また当院の県内唯一の特徴としては一部ではあります。RAにおける静脈洞内の高信号・Arterial spin labelingによる生理的静脈逆流と動脈脈の鑑別で弘前大学で学位もいただくことができました。放射線診断学講座の掛田伸吾教授をはじめとした関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

共有、若手の教育症例の共有などを若手にプレゼンをしてもらいながら毎朝勉強しています。放射線診断の領域は全身に及び、一人で全身をカバーすることは難しいため、各病院にいるスペシャリストの意見も聞ける体制となっています。もう一つは屋根瓦式の教育で、上級医が専攻医にマンツーマンで指導に当たっています。読影、IVRとも症例をとおして、いち早く独り立ちできる様に徹底的に指導をしています。指導にあたっては、昨今はパワハラに注意が必要であり、本人の性格、特性に合わせるようにしています。また日々の業務から専門医の試験対策もできる様に配慮しています。今後弘前大学からお預かりしている大切な若手が成長でき、戦力となる教育をしながら、当院の良質な医療の提供に努力していきたいと考えています。

皮膚科学講座の吉川未雪と申します。弘前出身で、弘前大学を卒業し、旧国立弘前病院での初期研修を終え、皮膚科に入局しました。皮膚科に入局して七年目になります。今回、医学部ウォーカーに寄稿する機会をいただき、自身の経験を踏まえ、皮膚科についてご紹介したいと思います。私が皮膚科に入局を決めたのは、研修医で皮膚科を回った際に指導医の先生が「皮膚科は内科的な側面もたくさんありますが、手術といたって外科的な側面もあります。青森県全域および秋田県北から特に皮膚悪性腫瘍(いわゆる皮膚癌)の患者さんが多く紹介されてくるので、手術、薬物療法、放射線治療など組み合わせ治療を行っています。皮膚は全身どの部位にもあり、皮膚癌ひとつをとって

も決して同じ部位に同じ形

若手教員・医師だより

皮膚科学講座 助手 吉川 未雪

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鶴桜医学振興会発足(任意団体)
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
○医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
○医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
○地域医療の振興に寄与する事業への支援
○海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

◎寄附のお願い
青森県の医学・医療の発展を促進するための各事業活動の一層の充実を図って参りたいので、皆様の格別のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。随時、ご寄附を受付しております。
本会の公益目的事業に対する寄附金は、確定申告をさせていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

◎当会への入会のごお願い
当会の事業活動に継続的にご支援・ご協力をいただける方は、ご入会くださるようお願い申し上げます。年会費は次のとおりとなっており、年会費も寄附金と同様に、確定申告をさせていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

会員種別	年会費
医学部教員	1万円
医学部卒業生等	2万円
賛同する個人	2万円
賛同する団体	10万円

◎ご支援ご協力いただける方のご連絡をお待ちしております。

【問合せ先】 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872
学内内線 6519
E-mail : info@aomori-mpm.jp

(前ページより)
の皮膚癌はありません。患者さんの皮膚のゆとりによっても術式は変わりますし、毎回ベストな治療を模索し続けています。手術をしたあとの術後のフォローも自分たちで行いますし、その後化学療法が必要となった場合にも自分たちで治療指針を決めて一貫して治療を行うことができません。また、乾癬やアトピー性皮膚炎は新規治療薬もどんどん増えており、以前では治せなかった皮膚が改善していくのも治療のしがいがあります。皮膚科はメ

ジャーな疾患以外にもたくさん分野があるので、必ずひとつは自分にしっくりくるサブスペシャリティがみつかるはずですよ。
最近では毎年数名の入室者がおり、今年度は四名の入室者を迎えました。二〇二三年十月に現在の赤坂教授が就任し、医局全体が活発になってきています。皮膚科に興味のある学生さんや研修医の先生方、ぜひお待ちしております。
「誰にでも見える皮膚を通して誰もみたことのない世界を探しましょう」

若手教員・医師だより

泌尿器科 助教 小玉 寛 健

泌尿器科の小玉寛健です。私は初期研修を経て、二〇一七年に弘前大学泌尿器科に入局しました。泌尿器科は、悪性腫瘍、腎移植、排尿障害、小児泌尿器、透析、尿路結石、感染症、不妊症、性機能障害など、多岐にわたる疾患を扱う非常に幅広い学問です。これら治療までをほとんど科内で完結できる点が泌尿器科の大きな特徴であり魅力の一つです。検査による鑑別診断、薬物療法をはじめとした内科的治療、さらにはロボット支援手術や腹腔鏡手術などの外科的技術まで幅広く関与できる点にやりがいを感じています。

その中でも私は特に腎移植に関心を持ち日々の診療に取り組んでいます。二〇二三年には畠山教授、大山前教授のご尽力のもと、国内有数の腎移植ハイボ

リユームセンターへ留学する機会をいただき、腎移植の知識と技術を学ぶことができました。現在はその経験を日常診療に活かしながら、より質の高い移植医療の提供ができるよう努めています。
腎移植の魅力は何よりも、患者さんの生活が劇的に改善されることにあります。透析生活から解放され、通院回数の減少や食事制限の緩和により、患者さんのQOLは大きく向上します。術後、患者さんの表情が明るく変化していくのが目に見えてわかります。また感謝の言葉をいただくことも多く、医者冥利に尽きる瞬間です。
ただし、腎移植は泌尿器科単独で完結する医療ではありません。畠山教授の多方面にわたるマネジメントのご尽力のもと、腎臓内科をはじめとした各診療科の

社会医学講座

社会医学講座 教授 井原 一成

本稿は、私が書く二度目の講座紹介です。写真の面々は、私と中路先生を除き五年前の医学部ウォーカーからすっかり変わっています。アクティブな研究室の証左？ですが、本講座は、臨床系講座や基礎系講座から少し離れた場所にあるため、本町地区でも新しいメンバーを知らない方達が多いと拝察します。よって、今回は、主に現在のメンバーを紹介したいと思います。

二〇二二年に着任した楊一馳教員は、北海道大学の修士課程ではコロナ対策で高名な西浦教授に師事、同先生方、薬剤師、看護師、移植コーディネーターなど、多くの医療スタッフとの連携、そして何より腎臓を提供していただくドナーさんの存在が初めて初めて成り立つ、まさに「チーム医療」の結晶です。移植に携わるすべての方々に感謝しながら、患者さんの人生がより豊かになるよう、泌尿器科医として支えていきたいと考えています。

教授と沢山の感染症の数理モデル研究を発表、博士課程で疫学・医用統計学に転じた数理統計学者です。私も疫学統計が好きなので、ヤン教員が着任してからは、基礎的な理論から最新の統計手法までむらなく国際水準で院生を指導することができるようになりました。

特任教員として着任して一息つきました。彼はハーバード大でイチロー・カワチ教授の薫陶を受けたソーシヤル・キャピタル研究者です。
今年初めからは、平田幸暉Dが、青森の健康に貢

に取組んでいます。社会医学講座全体としては、伊東教授や村下教授のご依頼を得てJPEAKSのプロジェクトに密接に関わっています。講座本来の教育・研究のエフォートとバランスがとれるようにと、今春からはグローバル Felipe Sandoval助教を応援に出していただきました。老年学者の氏は、介護レセプト研究の経験があることで、医療経済研究を進展させてくれるのではと期待しています。

座の研究と国籍の多様性が進みました。吉田Dも中国出身のヤン先生や留学生、そしてスペイン語圏出身(南米チリ)のSandoval先生も英語を流暢に操り、講座勉強会は英語になりました。世界に近づいた、と次の講座紹介では誰かが書いてくれることを願っています。



コラム 医学部 こぼれ話

今日は学生教育の話題をすこし「こぼし」てみたいと思います。現在進行形で医学教育の力キキラムをどうすべきか、を検討中です。実際は現在のトレンドに則った教育システムの構築が急務になっているという切羽詰まった事情もあります。教育力キキラムの変更は、学生だけでなく教員側の負担も必要になるのですが、最大の目的は「国家試験の合格率アップ」です。その為に臨床実習を早々に終えて、たっぴりと国家試験の勉強をして「全員に」合格していただきたい、という親心があることをご理解いただけますと幸いです。ただ、難しい課題とは、現在各科ごとに行われている試験を「統一試験」にした場合、どう評価すべ

きかです。統一試験は基礎から臨床まで、複数診療科の知識を関連付けて学習するため、国家試験・CBT対策に有用なのは明らかですが、極端に悪い科目があった場合、合格でいいのか？という課題に直面しますが、目先の国家試験か？医師としての涵養か？と問われたら、このご時世、まずは国家試験合格！しかありません。まだまだ課題が山積みですが、これを機会により力キキラムを構築して、学生も満足、教員も満足、大学も満足できるWin×Win×Winな未来になるよう議論を深めたいと思っております。皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

リハビリテーション医学講座

リハビリテーション医学講座 教授 津田 英一



リハビリテーション医療の対象となる疾患は多種多様であり、研究活動の領域も広範囲に及びます。当科では日常診療でみられる課題に対して、その解決に向けた臨床研究を中心に行っています。

生体情報を取得し、危険因子の特定や予防プログラムの効果検証を行っています。また、より簡便にデータ取得が可能なマーカーレス動作解析を用いて、中・高齢者の変性疾患を対象として、遠隔医療によるADL動作解析の研究も開始しました。

運動器疾患に対しては、スポーツ障害・外傷の予防をテーマにバスケットボール、陸上競技、体操競技、スキージャンプ競技を対象として研究を展開しています。フィードバックによりモーションキャプチャやウェアラブルセンサーによる動作解析、画像解析、

床評価による治療効果の検証とともに、動作解析、筋電図解析、画像解析により、効果発現機序の解明にも取り組んでいます。今後はフレイルやロコモティブシンドロームの予防を目的とした、先制医療としてのロボットリハビリテーションの有用性についても研究を進めていきます。

嚥下障害に対しては、特に人工呼吸管理の抜管後急性期に見られる嚥下障害に注目し、早期からのリハビリテーション治療に積極的に取り組んでいます。また、嚥下障害の背景にある全身的な危険因子についても、日々の診療を通じて研究を進めています。ICUでのさまざまな疾患に関連する嚥下障害の特徴を明らかにしながら、より効果的に患者さんに寄り添ったリハビリテーション治療の確立を目指して、さらに研究を深めていく予定です。

脳血管リハビリテーションは、「脳血管」と分類されていますが対象疾患は脳卒中に限らず脳腫瘍、頭部外傷、脊髄疾患、神経変性疾患、神経筋疾患、末梢神経障害など多岐にわたります。集学的治療を要する悪性脳腫瘍症例や、希少な神経疾患に対するリハビリテーション治療は大学病院特有です。急性期に限らず、慢性期、生活期にもボツリヌス毒素による痙縮治療や装具作成、高次脳機能

部活動紹介

陸上競技部

医学部陸上部 酒谷 泰生

医学部陸上部は二〇二五年で創部六十五年を迎えました。OB、OG総勢二百九十四名、現在部員は新入生にも恵まれ、男子三十二名、女子四十名の計七十二名で活動しております。昨年度は北医体にて男女総合第三位、東医体にて女子フィールド優勝、女子総合第二位という結果を残すことができました。

陸上競技部は、水・土の週二回練習を行っています。夏場は弘前市の陸上競技場や弘前公園、冬場は坂や体育館を利用しながら練習しています。大きな目標としては北医体と東医体の二大会がありますが、これ以外にも青森県内外で行われる大会や毎年十月に開催されるアップルマラソンにもたくさんさんの部員が参加しています。週二の練習では少ないように感じるかもしれませんが、トレーニング室で自主練に励む人も多く、障害に対する制度利用のサポートや就業支援など、多様な関わりを持っています。

研究面では、脳動脈瘤性くも膜下出血症例に対するリハビリテーション治療の安全性や新規治療薬との関連に関する研究を中心に、エビデンスの少ない悪性脳腫瘍に対するリハビリテーション治療の研究も進めています。

部員は初心者から大会で優勝する人まで幅広いですが、それぞれが目標に向かって努力しています。未経験者でありながら、大きな大会で入賞する部員も多く、これは陸上競技が誰でも始めやすいスポーツであるが故だと思えます。練習以外にも花見や他大学との合同合宿、運動会、忘年会など、楽しいイベントがたくさんあります。HP (<https://to/aewZK47pUx/>) X (twitter.com/hirosaki_riku) Instagram (https://www.instagram.com/hirosaki_u_riku?igsh=MWpuN2FhdGFSMDNlOQ==) 日々



医学部管弦楽団

医学部四年 唐津 侑生

私たちが医学部管弦楽団は、現在総勢四十五名を超える人数で活動をしており、大学から新しく楽器を始めたい方もおり、和気藹々とした雰囲気の中で練習を重ねています。本楽団の活動を発信しているのに興味のある方は少しでも覗いてみてください。新しい仲間との出会いを心からお待ちしております。

は夏・冬に弘前大学附属病院の待合室にて入院患者様向けに院内コンサートを実施している他、学祭での演奏、解剖体慰霊祭での演奏など様々な場所で活動しております。これらの演奏会に向けて週一回合奏練習を設けており、この練習時間で様々な学年の部員との関わりを持ちつつ楽しい雰囲気の中で音楽を楽しんでおります。他にも、お花見、キャンピングなどの音楽以外の活動も行い学年問わず部員同士で仲を深められます。

本楽団の大きな魅力は、音楽を介して垣根を超えた関係を築けることです。作曲者に関するお話、好きな曲のお話、コンサートで演奏してみた曲に関する話、これらは世代に関わらず一貫しているものです。それらを通じて、部員たち、時にはOB・OGの医師の先輩方、そして時には教授の先生も演奏に加わってくださり、私たちの音楽



附属病院院内コンサートの様子@附属病院中央待合ホール

を作り上げていけるといえる魅力です。学業や実習で忙しい中でも、音楽を通じてリフレッシュできる時間や、将来同じ医療の道を歩む仲間と深い絆を築けるのは、大きな支えとなります。音楽の技術だけでなく、人との繋がりが協力の大切さを感じられる場所です。少しでも興味のある方は、ぜひ気軽に見学いらしてください。音楽と仲間に出会える素敵な時間は、新たな自分と出会うきっかけとなるはずですよ。

人事異動 (R7.3.1~R7.5.31)

●医学研究科所属

【定年退職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.3.31	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	教授	松原 篤	
R7.3.31	医学医療情報学講座	教授	佐々木 賀広	地域医療学講座 特任教授
R7.3.31	バイオメカニカルリサーチセンター (脳神経病理学)	准教授	森 文秋	
R7.3.31	地域基盤型医療人材育成センター (医学教育学)	講師	松谷 秀哉	
R7.3.31	バイオメカニカルリサーチセンター (血管炎症医学)	助教	瀬谷 和彦	

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.4.1	麻酔科学講座	教授	斎藤 淳一	麻酔科 講師
R7.4.1	医学医療情報学講座	教授	松坂 方士	医療情報部 准教授
R7.4.1	皮膚科学講座	准教授	六戸 大樹	皮膚科 講師
R7.4.1	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	准教授	工藤 直美	耳鼻咽喉科頭頸部外科 講師
R7.4.1	大館・北秋田地域医療推進学講座	准教授	諸橋 一	消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科 講師
R7.4.1	社会医学講座	特任准教授	吉田 一隆	社会医学講座 特任助教
R7.4.1	健康未来イノベーションセンター	特任講師	田中 直	健康未来イノベーションセンター 特任助教
R7.4.1	バイオメカニカルリサーチセンター (分子病態病理学)	助教	榎引 英恵	バイオメカニカルリサーチセンター (分子病態病理学) 助手

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.3.1	社会医学講座	特任助教	SANCHEZ GARRIDO FELIPE ALFONSO	筑波大学大学院地球規模課題プログラム 助教
R7.4.1	地域医療学講座	特任教授	佐々木 賀広	医学医療情報学講座 教授
R7.4.1	感染生体防御学講座	助教	前田 昂樹	株式会社南部医理科
R7.4.1	消化器外科学講座	助教	久保田 隼介	青森市民病院 副部長
R7.4.1	歯科口腔外科学講座	助教	伊神 英治	公立野辺地病院
R7.4.1	地域医療学講座	助教	小野 翔真	青森労災病院
R7.4.1	地域医療支援学講座	助教	間山 恒	弘前総合医療センター 医長
R7.4.1	地域救急医療学講座	助教	小川 哲也	はまなす医療養育センター
R7.4.1	地域周期管理医学講座	助教	加藤 広大	青森県立中央病院
R7.4.1	胸部心臓血管外科学講座	助手	渡邊 崇人	呼吸器外科・心臓血管外科 病院助手
R7.4.1	泌尿器科学講座	助手	石井 伯昂	青森労災病院
R7.4.1	産科婦人科学講座	助手	黒瀧 紗希	産科婦人科 病院助手
R7.4.1	総合地域医療推進学講座	助手	佐々木 貴夫	聖マリアンナ医科大学
R7.4.1	先進血液浄化療法学講座	助手	田中 龍馬	青森市民病院
R7.4.1	先進血液浄化療法学講座	助手	大石 卓也	むつ総合病院
R7.4.1	健康未来イノベーション研究機構	特任助手	宮本 奈穂美	健康・医療データサイエンス研究センター 研究開発研究員
R7.4.1	健康未来イノベーション研究機構	特任助手	池田 裕一	健康・医療データサイエンス研究センター 技術補佐員
R7.4.1	グローバルWell-being総合研究所	特任助手	國府田 澁	筑波大学附属病院 臨床研修医

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.4.1	消化器外科学講座	講師	長瀬 勇人	消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科 講師
R7.4.1	消化器外科学講座	助教	鶴田 覚	高度救命救急センター 助教
R7.4.1	脳神経外科学講座	助教	片山 耕輔	脳神経外科 助教
R7.4.1	救急災害・総合診療医学講座	助教	平井 直樹	麻酔科 助教
R7.4.1	大館・北秋田地域医療推進学講座	助教	水沼 慎人	産科婦人科学講座 助教
R7.4.1	心臓病態先進治療学講座	助教	山崎 堅	高度救命救急センター 助教
R7.5.1	循環器腎臓内科学講座	助教	山崎 堅	心臓病態先進治療学講座 助教
R7.5.1	心臓病態先進治療学講座	助手	濱浦 爽悟	循環器腎臓内科学講座 助手

【任期満了退職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.3.15	感染生体防御学講座	助教	SUBSOMWONG PHAWINEE	
R7.3.31	大館・北秋田地域医療推進学講座	特任准教授	BERMAN SHARI JOY	
R7.3.31	地域医療学講座	助教	中田 有紀	東北医科薬科大学
R7.3.31	健康寿命延伸学講座	特任助教	藤本 健二	理工学研究科 助教

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.3.31	大館・北秋田地域医療推進学講座	准教授	木村 憲央	青森市民病院外科
R7.3.31	地域周期管理医学講座	准教授	丹羽 英智	函館中央病院
R7.3.31	胸部心臓血管外科学講座	助教	川村 知紀	弘前中央病院
R7.3.31	大館・北秋田地域医療推進学講座	助教	赤石 麻美	弘前総合医療センター
R7.3.31	地域救急医療学講座	助教	猿賀 達郎	弘前記念病院
R7.3.31	泌尿器科学講座	助手	尾崎 魁	青森県立中央病院
R7.3.31	救急災害・総合診療医学講座	助手	市川 詩乃	麻酔科 病院助手
R7.3.31	総合地域医療推進学講座	助手	木下 翔平	青森新都市病院

診療教授等新規称号付与者 (R7.3~R7.5)

称 号	氏 名	所 属	期 間
診療教授	三上 誠	形成外科	令和7年4月1日~令和10年3月31日
診療准教授	高畑 淳子	耳鼻咽喉科頭頸部外科	令和7年4月1日~令和10年3月31日
診療准教授	和田 尚子	形成外科	令和7年4月1日~令和10年3月31日
診療講師	飯田 圭一郎	形成外科	令和7年4月1日~令和10年3月31日

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.4.1	呼吸器外科・心臓血管外科	講師	于 在強	胸部心臓血管外科学講座 助教
R7.4.1	消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科	講師	室谷 隆裕	消化器外科学講座 助教
R7.4.1	消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科	講師	若狭 悠介	消化器外科学講座 助教
R7.4.1	耳鼻咽喉科頭頸部外科	講師	後藤 真一	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 助教
R7.4.1	歯科口腔外科	講師	成田 紀彦	歯科口腔外科学講座 助教
R7.4.1	臨床試験管理センター	講師	中川 潤一	薬剤部 助教
R7.4.1	呼吸器外科・心臓血管外科	助教	山崎 志穂	呼吸器外科・心臓血管外科 助手
R7.5.1	麻酔科	講師	中井 希紫子	麻酔科 助教

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.4.1	泌尿器科	講師	三上 穂太郎	むつ総合病院
R7.4.1	泌尿器科	講師	小島 由太	鷹揚郷腎研究所弘前病院
R7.4.1	内分泌内科・糖尿病代謝内科	助教	藤田 朋之	青森県立中央病院
R7.4.1	内分泌内科・糖尿病代謝内科	助教	水尻 諭	大館市立総合病院
R7.4.1	耳鼻咽喉科頭頸部外科	助教	前田 泰規	日本大学医学部附属病院
R7.4.1	麻酔科	助教	大山 翼	つがる総合病院
R7.4.1	リハビリテーション科	助教	金子 翔	大館市立総合病院
R7.4.1	総合診療部	助教	平野 貴大	深浦診療所
R7.4.1	高度救命救急センター	助教	福島 高志	大館市立総合病院
R7.4.1	高度救命救急センター	助教	藤田 博陽	青森県立中央病院
R7.4.1	高度救命救急センター	助教	濱舘 美里	八戸市立市民病院
R7.4.1	高度救命救急センター	助教	杉山 佳奈	高度救命救急センター 病院助手

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.3.1	循環器内科・腎臓内科	講師	澁谷 修司	心臓病態先進治療学講座 講師
R7.4.1	消化器内科・血液内科・免疫内科	助教	蓮井 桂介	地域医療支援学講座 助教
R7.4.1	泌尿器科	助教	小玉 寛健	先進血液浄化療法学講座 助教
R7.4.1	脳神経外科	助教	梶 友紘	脳神経外科学講座 助教
R7.4.1	薬剤部	助教	横山 智士	薬剤部 薬剤師

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.3.31	泌尿器科	講師	村澤 洋美	鷹揚郷腎研究所弘前病院
R7.3.31	泌尿器科	講師	佐藤 天童	鷹揚郷腎研究所弘前病院
R7.3.31	歯科口腔外科	講師	伊藤 良平	なし
R7.3.31	臨床試験管理センター	講師	工藤 正純	国際医療福祉大学病院
R7.3.31	消化器内科・血液内科・免疫内科	助教	立田 卓登	青森県立中央病院
R7.3.31	呼吸器内科・感染症科	助教	石岡 佳子	弘前総合医療センター
R7.3.31	内分泌内科・糖尿病代謝内科	助教	西谷 佑希	黒石市国民健康保険 黒石病院
R7.3.31	内分泌内科・糖尿病代謝内科	助教	達増 みずき	東北医科薬科大学
R7.3.31	泌尿器科	助教	濱谷 智子	日本119救急センター-弘前第二救急総合医療センター
R7.3.31	眼科	助教	丹藤 利夫	青森県立中央病院
R7.3.31	耳鼻咽喉科頭頸部外科	助教	原 隆太郎	むつ総合病院
R7.3.31	リハビリテーション科	助教	武田 温	青森県立中央病院
R7.3.31	病理部	助教	木村 相泰	山口大学
R7.3.31	神経科精神科	助手	神 崇太	愛成会病院
R7.3.31	呼吸器外科・心臓血管外科	助手	谷 建吾	青森県立中央病院
R7.5.31	整形外科	助教	古川 正和	むつ総合病院

臨床教授・臨床准教授新規称号付与者名簿 (令和7年4月1日付)

称号名	氏 名	所 属	称号付与期間
臨床教授	三浦 理絵	青森県立中央病院 産婦人科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	佐々木 亮	青森市民病院 耳鼻いんこう科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	榎引 基	青森県立中央病院 循環器内科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	松井 宏光	八戸市立市民病院 循環器科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	近藤 慎浩	青森市民病院 心臓血管外科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	木村 憲央	青森市民病院 外科医師	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	坂本 義之	独立行政法人国立病院機構弘前総合医療センター 消化器外科医長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	久保 寛仁	大館市立総合病院 外科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床教授	米内山 真之介	三沢市立三沢病院 外科医長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床准教授	千葉 仁美	青森県立中央病院 産婦人科副部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床准教授	田中 光	青森市民病院 糖尿病・内分泌内科部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床准教授	工藤 孝志	十和田市立中央病院 眼科診療部長	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床准教授	川村 知紀	弘前中央病院 外科医師	2025年4月1日 ~2028年3月31日
臨床准教授	赤坂 治枝	独立行政法人国立病院機構弘前総合医療センター 消化器外科医師	2025年4月1日 ~2028年3月31日

医学部ウォーカー第百十三号を無事発行できました。ご協力いただきました先生方や学生の皆様、心より感謝申し上げます。とくに本号では、昨年度末で研究科をご退職された六名の先生方よりご寄稿いただきました。長年にわたり研究科の発展にご尽力いただいたことに、重ねて御礼申し上げます。

昨今は経済の不安定化や社会情勢の変化に伴い、予算・人事ポイントの削減など、医学研究科における研究・教育・社会活動の基盤を揺るがしかねない状況が生じつつあります。そのような中で、前号・本号で石橋研究科長より紹介されたIPEAKSの採択・グローバルWell-being総合研究所の完成は一筋の光明といえます。また学部学生の活躍も明るい話題を提供しております。三次研究室の研修については、このたび寄稿のあった優秀発表賞を受賞した学生を含め、いずれの学生も教員の指導の下で立派な研究を行っており、また令和六年度学生表彰は東医体での活躍が評価を受けたものですが、課外活動も学生生活の柱の一つです。運動系・文化系を問わず、学部学生には積極的に参加してもらいたいところですね。

新年度が始まり、弘前大学および医学研究科をとりまく状況もさらに変動していくものと予想されます。医学部ウォーカーでは医学研究科の情報をいち早く皆様にお届けいたしますので、引き続きよろしくお願いたします。

編集後記